

日系南米人の若者のアイデンティティと生活経験の関係

—三重県でのアンケート調査をもとに—

永田 素彦・藤本 久司

要旨：三重県に住む日系南米人の若者 69 名を対象としたアンケート調査に基づき、彼らのエスニック・アイデンティティと生活関係の関連を検討した。その結果、(1)彼らのアイデンティティ形成は、来日時年齢や滞在期間と強く関連していること、(2)アイデンティティについては出身国アイデンティティを持つ若者が多いのと比べて、将来の出身国については母国を選択する割合が小さいこと、(3)家庭での使用言語、差別・いじめの経験が、アイデンティティと関連していることを見出した。

1. 問題

1990 年の入管法改正以降、日本に暮らす日系外国人の数は、増加の一途をたどっている。三重県は近年特にその傾向が強い。法務省の「平成 18 年度在留外国人統計」によると、2005 年 1 年間の外国人登録者数の前年比増加数は 4,730 人、増加率 11.4%で、ともに全国トップであり、外国人登録者が人口に占める割合は 2.48%と、東京都、愛知県に次いで全国第 3 位となった。これらの変化の要因の一つは、ブラジル、ペルー、ボリビアなどから来た日系人の増加であり、日系南米人の集住が進む東海地方の中でもとりわけ際立っている。最近では家族とともに来日し、長期的に滞在しないし定住する傾向が強まっている。

そのような中、近年特に重視されているのが、日系南米人の若者の問題である。特に、学齢期の子どもについては、日本語ができず、生活習慣になじめず、日本の学校に適応できないケースが多く、不登校や不就学になることも珍しくない（宮島，2003，7 章；太田・坪谷，2005）。学校に通っていても、日本語が満足にできない子どもは、教科学習にもついていけず、高校進学も難しい。実際、1999 年文部省学校基本調査によれば、外国籍生徒の高校進学率は 49.7%であり、日本人と比べて著しく低い。最近では、学校に適応できず、就職もできない外国籍の若者の非行化を心配する声も根強い¹⁾。

こうした問題の大きな要因の一つとして、日系南米の若者とその親にとって、中長期的な将来像が定まらないという問題がある。その理由の一つは、彼らの多くが不安定な雇用状態にあることだ（梶田・丹野・樋口，2005，6 章）。非正規雇用労働者として一年毎の契約更新が必要で、失業の不安が大きな状態では、長期的な生活設計をすることは難しい。一方、日系南米人の多くは、当初は短期の出稼ぎ目的で来日しており、目標の金額を稼げばすぐにでも母国に戻るつもりでいる。日本を生活の基盤にするつもりがない人々の大半は、子どもが日本語を覚えたり、日本の学校で学んだりすることにも消極的である。しかし実際には、さまざまな事情から、日本での滞在が予定以上に長期化するケースが多い。そのような場合であっても、「どうせすぐに母国に戻るのだから」と子どもの教育をなおざりにするケースも少なくなく、結果として、日本語もできず、学校にも通わない（通えない）子どもたちが増えることになる（イ

シカワ, 2005; 宮島, 2003, 6章)。

このような不安定さは、子どもたちのアイデンティティ、特にエスニック・アイデンティティ²⁾の問題とも大きく関わっている。エスニック・アイデンティティは、自分があるエスニック集団に所属しているという所属感と、それに伴う評価や感情である (Phinney, 1996)。異文化で生活する子どもたちにとって、エスニック・アイデンティティの形成と維持は重要な問題であり、自分らしさの中核たるアイデンティティ形成とも密接に関わる。エスニック・アイデンティティの形成は、いくつかの要因と強く関連している。第1は、言語能力や文化的規範である。そのエスニシティの母語を自由自在に操り、文化に共有された自明の価値体系や規範を体得することが、エスニック・アイデンティティ形成の条件といえる (箕浦, 1991; 鈴木, 2004)。第2は、差異の認知である。一般には、異文化体験により、反照的に、自らのエスニック・アイデンティティが強化される。しかし、日系外国人の場合、主流文化との対照において、常に異なるアイデンティティを意識させられる機会が多く (母国では日本人 (ニッケイ) と呼ばれ、日本では外国人と呼ばれる)、エスニック・アイデンティティが揺らぎやすい (関口, 2003; 辻本, 1998)。第3は、社会文化的環境である。エスニック・アイデンティティは、自分を肯定的に受け入れてくれる社会文化的環境のもとで形成され、自分が排除されていると認知されるような環境のもとでは維持されにくい (鈴木, 2005; 辻本, 1998)。

母国を離れて外国で生活する子どもたちにとって、エスニック・アイデンティティの形成と関連する生活経験上の要因にはどのようなものがあるだろうか。箕浦 (1991) は、アメリカ・ロスアンゼルスに暮らす日本人の子どもたちを対象とした調査結果の重回帰分析から、文化的アイデンティティ形成には、アメリカでの滞在期間と渡航時年齢の寄与が最も大きく (滞在期間が長く、渡航時年齢が若いほど、アメリカ文化へ同化する)、アメリカ人との交友の密度、子供の英語力 (自己評定) の影響も大きいこと、一方、家庭環境の影響はあまり大きくないことを見出している。また、鈴木 (2004) は、インドネシア在住の日系国際児を対象とした調査で、文化的アイデンティティの形成には、居住地 (国)、日本人の親の性別、両親の文化 (国) の組み合わせ、子供の外見的特徴、家庭環境 (家族構成、言語使用、経済状態など)、学校環境、などの要因が影響を及ぼすことを示唆している。

本稿は、南米出身の日系人の若者を対象に、彼らのアイデンティティと生活経験との関連を明らかにすることを目的としている。より具体的には、アイデンティティおよび将来住みたい国と、来日年齢、日本での就学・就職経験などの生活史的特徴、家族関係、友人関係などの人間関係、生活満足度、日本への好感などの日常的意識との関連を総合的に考察する。以下、2節では、2005年に実施した「日系人の若者のアンケート調査」の概要と分析結果を報告する。3節では、2節の結果を、日系人の若者に評価してもらうために実施した面接調査の結果を報告する。4節では、本研究の成果を総括し、今後の展望を述べる。

2. 日系南米人の若者へのアンケート調査

(1) データ

本研究が依拠するデータは、「日系ブラジル人の少年犯罪に関わる社会環境についての研究」(社会安全研究財団、代表: 児玉克哉、2005年)の一環として実施された、日系南米出身者の若者へのアンケート調査のデータである。筆者らは、当該研究の一員として、主にアンケート

分析を担当した。なお、調査結果の概要については児玉他（2005）を参照されたい。

(2) 調査概要

アンケート調査の目的は、三重県に住む南米出身の若者の、日本人や日本の学校に対する評価、自分のアイデンティティや将来に対する意識、家族・友人関係の概要を明らかにすることであった。調査時期は、2005年4月下旬から5月末である。三重県に住む中学生から25歳までの南米出身者で、日本に1年以上在住している者を調査対象とした。調査対象者には、日本人・日系人の外国人支援NPO関係者、日系人の大学生・大学院生を介してアプローチし、アンケート調査への協力を依頼した。調査方法は、質問票を用いた構造化面接法であった。質問票は、日本語、ポルトガル語、スペイン語の3種類を用意した。面接も、調査対象者の言語に応じて、日本語、ポルトガル語、スペイン語のいずれかで実施した。

有効回答数は、69名であった。内訳は、性別：男40、女29；年齢：13-15歳25、16-18歳19、19-22歳14、23-25歳11；現在の居住地：伊賀市30、鈴鹿市30、その他9；日本滞在合計年数：1-3年13、4-5年12、6-10年24、11年以上20；出生国：ブラジル37、ペルー18、ベネズエラ4、ボリビア3、日本7；来日時の年齢：日本で生まれた6、7歳未満22、7-12歳19、13-15歳9、16-18歳6、19-22歳7、23歳以上0、であった。

質問紙の構成は次の通りである。0) デモグラフィック項目、1) 学校に関すること、2) 日本の学校に対する評価、3) 相談相手に関すること、4) 家族に関すること、5) 友人・交友関係に関すること、6) 日本や日本人、アイデンティティに関すること、7) 生きがいや将来に関すること、8) 南米出身の若者の問題行動や共生に関する自由回答。

本稿では、特に、アイデンティティと将来に関することと、その他の項目との関連を分析する。アイデンティティについては、「あなた自身の意識はどれに近いでしょうか」という項目に対して、「1.日本人だという意識が強い」「2.出身国人だという意識が強い」「3.1と2の意識が共存している」「4.よくわからない」の4つの選択肢から1つを選択するよう求めた。将来に関することについては、「あなたは将来も日本に住みたいですか。母国（南米）に住みたいですか」という質問に、「1.日本に住みたい」「2.母国に住みたい」「3.わからない」の3つの選択肢を用意した。

ここで、エスニック・アイデンティティとアイデンティティ項目の関連について若干ふれておきたい。郡司（2005）は日系ブラジル人の子どもをめぐる研究のパースペクティブを、①同化再生産型、②文化的越境型、③積極的位置取り型の3群に整理し、各パースペクティブにおけるアイデンティティとエスニシティの関係を詳細に述べている。本研究のアイデンティティ項目は、「国籍に基づく集団とともに、そこに属する人たちがもっているであろうとされる『文化』を想定している」という意味で「アイデンティティ=エスニシティ」であり、研究群①の定義に近い。ただし、研究群①が持つ「『日本』—『ブラジル』、あるいはその中間にある『日系ブラジル人』の二項対立的な軸上で論を展開する」だけではなく、「共存」「わからない」の回答に加えることによって、研究群②の「民族や国家という枠組みを越えた多元的・流動的なアイデンティティを保持した存在」「アイデンティティ=アイデンティフィケーション」としての立場も考慮している。

(3) 結果

1) アイデンティティと将来の居住国

自分が何人だという意識が強いかという質問に対しては、日本人（8名）、出身国人（38名）、両者が混在（11名）、よくわからない（6名）であった（無回答6名）。また、将来も日本に住みたいか、母国（南米）に住みたいかという質問に対しては、日本（28名）、母国（15名）、わからない（25名）であった（無回答1名）。アイデンティティや自分の将来といった根本的な部分で、迷いをもっている若者が少なくないことが見てとれる。

表1は両者のクロス表である（ $\chi^2=21.45$, $p<.01$ ）。表からわかるように、日本人としてのアイデンティティをもつ若者は将来も日本に居住しようと考えているのに対し、出身国人としてのアイデンティティをもつ若者は、将来の居住国について、日本、出身国、わからないにほぼ三分される。

表1 アイデンティティと将来の居住国のクロス表

		将来の居住国			計
		日本	出身国	わからない	
アイデンティティ	日本人	8	0	0	8
	出身国人	13	13	12	38
	両者が共存	5	1	5	11
	わからない	1	0	5	6
計		27	14	22	63

2) アイデンティティおよび将来の居住国と他変数とのクロス表分析

アイデンティティおよび将来の居住国と、他の変数との関連を明らかにするために、クロス表分析を行った。 χ^2 検定の結果、有意な関連が見られたのは、アイデンティティについては、年齢、滞在年数、来日年齢、差別・いじめの経験、家庭での言語などであった。一方、将来の居住国とは、滞在年数、家庭での言語などが有意に関連していた。

年齢（表2）、来日年齢（表3）、滞在年数（表4）は、それぞれアイデンティティと関連していた（順に、 $\chi^2=19.36$, $p<.05$; $\chi^2=49.63$, $p<.01$; $\chi^2=30.88$, $p<.01$ ）。年齢とアイデンティティの関連を見ると、日本人という回答は、年齢が小さいほど多く（8名中7名が13-15歳）、19歳以上ではゼロである。また、16歳以上（40名）の3/4が出身国人としてのアイデンティティをもっている。来日年齢については、日本で生まれた5名は全員がアイデンティティを日本人と答えている。7歳未満で来日した者（20名）の回答は、出身国人（9名）、日本人（3名）、共存（4名）、わからない（4名）と分散しているが、7歳以上で来日した者の中に日本人アイデンティティをもっている者はいない。また、共存またはわからないと回答した者は、ほとんどが12歳以下で来日した者である。年齢的には、小学生か、その少し前での来日が主であると考えられる。滞在年数については、11年以上滞在者18名中、8名が日本人、4名が共存と回答したが、出身国人は3名のみであった。一方、10年以下滞在者に日本人との回答はなく、約8割が出身国人と回答している。滞在が10年を超えるかどうかで、アイデンティティが大きく異なっていることがわかる。

まとめると、日本で生まれたり、幼い頃に来日し、日本に11年以上滞在している中学生の年代には、日本人アイデンティティを持っている者が比較的多く、「共存」を含めると6, 7割

程度存在する。逆に、7歳以上で来日し、滞在10年以下で、現在19歳以上のいずれの場合でも、日本人アイデンティティを単独でもっている者はなく、ほとんどが出身国アイデンティティをもっている。年齢、来日年齢が上がり、滞在年数が少ないほど、出身国アイデンティティをもつ者の割合が多い。また、両者のアイデンティティが共存しているのは12歳以下で来日した者に多いほか、年齢、滞在年数の各区分にも一定の割合で存在している。

滞在年数は、将来の居住国とも関連する傾向にあった（表5、 $\chi^2=10.98$, $p<.10$ ）。滞在年数が10年以下の者（49名）の回答は、日本（16名）、出身国（15名）、わからない（18名）とほぼ三分されている。一方、滞在年数が11年以上の者（19名）は、日本（12名）とわからない（7名）に二分され、出身国に居住すると答えた者はいない。将来の居住国の回答理由に関する自由回答を見ると、滞在期間が短く出身国に住みたいと考えている者の理由は、家族や友達がいるからなどの積極的理由（「両親がペルーにいるから」など）、日本での生活に慣れないなどの消極的理由（「ここでの生活には慣れないので」など）がある。滞在が11年以上で日本に住みたいと考えている者の理由には、日本に生活の基盤があるからといった理由が多い（「私は基本的に日本生まれと同じ」、「母国についてあまり知識がないので、よく知っている日本のほうがいい」など）。わからない理由は、ほとんどが、日本での生活に慣れているが、母国や母国に住む家族への思いも断ちがたいといったものであった（「私はもうこの生活に慣れたけど、親戚は全員ブラジルにいる」、「母国に戻りたい気持ちは強いが、7歳の頃からずっと日本にいて、不安な気持ちの方が強い」など）。滞在が11年以上の者は、日本で成長し、日本が母国という意識に近い者もいれば、年少期の長期滞在で日本社会への適応がかなり進んでいる者もいる一方で、母国の社会、文化、習慣についてはほとんど覚えていないと思われる。滞在期間が11年以上で、将来出身国に居住したいと回答している者がいないのは、そのためであろう。

表2 年齢とアイデンティティのクロス表

		アイデンティティ				計
		日本人	出身国人	両者が共存	わからない	
年 齢	13 - 15 歳	7	8	4	4	23
	16 - 18 歳	1	13	3	0	17
	19 - 22 歳	0	10	1	2	13
	23 - 25 歳	0	7	3	0	10
	計	8	38	11	6	63

表3 来日年齢とアイデンティティのクロス表

来日年齢	アイデンティティ				計
	日本人	出身国人	両者が共存	わからない	
	誕生時	5	0	0	
7歳未満	3	9	4	4	20
7-12歳	0	11	5	2	18
13-15歳	0	8	1	0	9
16-18歳	0	5	0	0	5
19-22歳	0	5	1	0	6
計	8	38	11	6	63

表4 滞在年数とアイデンティティのクロス表

滞在年数	アイデンティティ				計
	日本人	出身国人	両者が共存	わからない	
	1-3年	0	10	1	
4-5年	0	8	2	0	10
6-10年	0	17	4	2	23
11年以上	8	3	4	3	18
計	8	38	11	6	63

表5 滞在年数と将来の居住国のクロス表

滞在年数	将来の居住国			計
	日本	出身国	わからない	
	1-3年	6	4	
4-5年	4	3	5	12
6-10年	6	8	10	24
11年以上	12	0	7	19
計	28	15	25	68

差別やいじめの経験とアイデンティティとの関連については、日本人と回答した者には非経験者が多く、出身国人と回答した者は37名中22名が経験している（表6、 $\chi^2=11.44$, $p<.05$ ）。自由回答では、出身国アイデンティティをもつ者や共存している者が、学校でのいじめ、店舗、職場、警察などでの差別体験に言及していた。自由回答から具体的に引用すると、「（学校で）いじめとかいっぱいあった」（16-18歳、女、アイデンティティ=ペルー人）、「警察と中学の先生の態度がやたらと（日本人のとときと）違う」（16-18歳、男、ブラジル人）、「小学校のときブラジルに帰れと言われたことがあり、すごく傷ついた」（19-22歳、女、ブラジル人）、「何年前、日本語があまり話せないときはとても苦勞した。いじめとか差別を受けた。このことはなかなか忘れられない」（16-18歳、女、共存）、「外国人であるためにデパートから排除された」（19-22歳、男、ブラジル人）、「仕事の中で何度も軽蔑され、悪い扱いを受けた」（23-25歳、女、共存）、「コンビニで買い物をするとき店員に無視されたり馬鹿にされたりし

た。いくら日本語がうまくなっても明らかに外国人の顔なので、日本人と溶け込んで暮らせないから母国に住みたい」(23-25歳、男、ブラジル人)、などのいじめ・差別体験が語られている。

表6 差別・いじめの経験とアイデンティティのクロス表

		アイデンティティ				計
		日本人	出身国人	両者が共存	わからない	
差別・いじめの経験	あ る	1	22	5	0	28
	な し	7	15	6	6	34
	計	8	37	11	6	62

家庭での言語は、アイデンティティ(表7)、将来の居住国(表8)と関連していた(それぞれ、 $\chi^2=37.36$, $p<.01$; $\chi^2=10.78$, $p<.05$)。家庭での言語を日本語のみと回答した者(5名)は、全員が日本人アイデンティティをもち、将来は日本に住みたいと回答している。一方、家庭での言語が母国語(ポルトガル語またはスペイン語)のみの回答者(35名)は、7割が出身国アイデンティティをもっているが、将来の居住国は、日本(10名)、出身国(9名)、わからない(16名)とわかれている。家庭で日本語と母国語の両方を話している者は、アイデンティティは出身国人が多いが、将来の居住国は日本との回答が多い。「母国語」の中にも、親は日本語しか話せないから家庭言語が母国語だが自分は話せるという者がいること、「日本語と母国語」のほとんどが、親子間では母国語だが兄弟間では日本語(も併用)というパターンであること、これらのことから家庭言語にかかわらず、現実的な選択として日本での居住を望む者が多いと考えられる。実際、自由回答を見ると、日本に住みたい理由には、日本語しかしゃべれない、日本に慣れている、日本の方が仕事がしやすい、などの回答が目立つ一方、母国に住みたい理由には、日本語がわからない、日本の習慣が好きじゃない、などの回答が目立つ。

表7 家庭での言語とアイデンティティのクロス表

		アイデンティティ				計
		日本人	出身国人	両者が共存	わからない	
家庭での言語	日 本 語	5	0	0	0	5
	母 国 語	1	22	4	5	32
	日本語と母国語	2	9	6	1	18
	計	8	31	10	6	55

表8 家庭での言語と将来の居住国のクロス表

		将来の居住国			計
		日本	出身国	わからない	
家庭での言語	日 本 語	5	0	0	5
	母 国 語	10	9	16	35
	日本語と母国語	11	3	6	20
	計	16	12	22	60

現在の就学・就職状況（日本の学校に通っているか、ブラジル人学校に通っているか、就職しているか）は、アイデンティティと関連する傾向にあった（ $\chi^2=16.03$, $p<.10$ ）。しかし、学校の選択とアイデンティティが関連しているとはいえ、両者の関係は、多分に年齢や滞在年数の効果に媒介されていると考えられる。出身国人、日本人の友人の数は、アイデンティティや将来の居住国とは明確な関連がほとんどなかった。唯一、出身国人の友人がいない者は、日本での居住を望んでいるという傾向があった。日本や日本人への好感の程度、生活満足度は、アイデンティティや将来の居住国と関連していなかった。

3) 数量化Ⅲ類による分析

以上述べてきたような日系人の若者のアイデンティティと生活状況の変数間の全体的な相互関連を明らかにするために、数量化Ⅲ類による分析を行った。数量化Ⅲ類は、パターン分類の数量化とも呼ばれ、カテゴリカルデータに対して、サンプル（回答者）からの反応パターンが近いカテゴリー（質問選択肢）同士に近い値を与え、カテゴリーに対する反応パターンが近いサンプル同士に近い値を与えるように、サンプルとカテゴリーの両者を同時に数量化する多変量解析の一種である。投入した変数は、次の17アイテム・55カテゴリーである。①アイデンティティ（ID）：1=日本人、2=出身国人、3=共存、4=わからない；②アイデンティティの変化（ID変化）：1=変化した、2=少し変化した、3=変化していない；③将来の居住国（将来）：1=日本、2=出身国、3=わからない；④現在学校に通っているか働いているか（現況）：1=日本の学校に通っている、2=ブラジル人学校に通っている、3=働いている、4=就学も就職もしていない；⑤日本の学校に通った経験（学校）：1=ある、2=ない；⑥心配事や悩みの相談相手（相談）：1=親と友人、2=親、3=友人、4=いない；⑦家庭で話す言語（家言語）：1=日本語、2=母国語、3=両方；⑧親とよく話をするか（親会話）：1=よく話す、2=あまり話さない；⑨親に対する不満：1=ない、2=ある；⑩同じ国や南米出身の友人（友人）：1=いない、2=1～4人、3=5人以上；⑪日本人の友人（J友人）：1=いない、2=1～4人、3=5人以上；⑫いじめや差別を受けた経験（差別）：1=ある、2=ない；⑬日本や日本人への好感（好感）：1=とても好感をもっている、2=まあ好感をもっている、3=わからない；⑭現在の生活に満足しているか（満足）：1=満足、2=どちらともいえない、3=不満；⑮年齢：1=13-15歳、2=16-18歳、3=19-22歳、4=23-25歳；⑯日本滞在の合計年数（滞在）：1=1-3年、2=4-5年、3=6-10年、4=11年以上；⑰来日時の年齢（来日）：1=日本で生まれた、2=7歳未満、3=7-12歳、4=13-15歳、5=16-18歳、6=19-22歳。

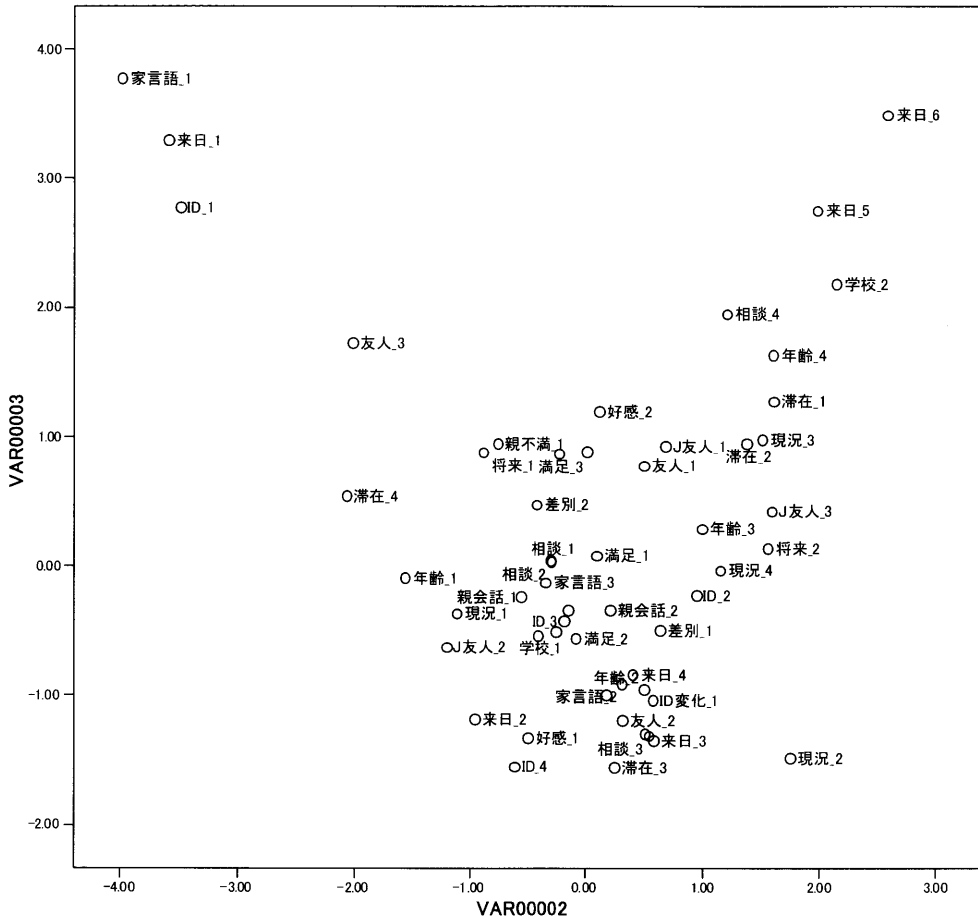


図1 アイデンティティ、将来の居住国および各質問項目の数量化Ⅲ類

図1は、カテゴリースコアの第1根と第2根をプロットしたものである（固有値は第1根が0.30、第2根が0.21）。第1軸を見ると、正方向には、将来2（将来は出身国に居住）、ID2（出身国人アイデンティティ）などがプロットされており、負方向には、家言語1（家庭での言語が日本語）、ID1（日本人アイデンティティ）などがプロットされている。このことから、第1軸は、回答者のアイデンティティ（-日本、+出身国）を表していると解釈できる。第2軸については、負方向にID4（アイデンティティがわからない）、滞在3（将来の居住国がわからない）などがプロットされており、アイデンティティや将来への確信度（-迷い、+確信）を表していると解釈できる。

また、年齢、来日年齢、滞在年数は、左上—中下—右上とU字型にプロットされている。すなわち、日本で生まれた者は、日本人アイデンティティが明確であるが、日本生まれでなく、中学生までに来日した者は、アイデンティティや将来に迷いを持っている傾向がある。来日年齢が高くなると（16歳以上）、出身国人アイデンティティが明確になる傾向にある。滞在年数、年齢にもほぼ同様の傾向をみてとることができる。滞在年数が短いものは（滞在1、滞在2）、出身国人アイデンティティが比較的明確であるが、滞在期間がやや長くなると（滞在3）、ア

アイデンティティや将来に迷いをもつ傾向が強くなる。しかし、滞在年数がさらに長くなると（滞在4）、日本人アイデンティティや日本に居住を望む傾向が強くなる。グラフ中下にはID変化1（アイデンティティが変化した）もプロットされており、中学生のころまでのアイデンティティが確定しないころまでに来日した者たちが、日本での滞在が長期化していく中でアイデンティティの動揺や変化を経験していることが示唆される。

3. 2節の結果に関するインタビュー調査

2節の結果は、南米日系人にとってどのような意味をもつであろうか。言い換えれば、以上の結果を当事者である南米日系人はどのように理解し、その理由をどのように考えるだろうか。このことを検討するために、三重県に在住する4名の南米出身者に、インタビューを行った。インタビュー協力者は、C（20代男、ペルー出身、16歳で来日、大学院生、県内の小学校や教会で外国籍児童の学習指導補助）、R（20代女、ペルー出身、15歳で来日、大学院生、県内の小学校や教会で外国籍児童の学習指導補助）、T（20代男、ブラジル出身、9歳で来日、大学生、地元で外国人対象の日本語教室のボランティアを継続）、M（30歳代後半女、主婦、ブラジル出身、10歳代後半で来日、19年経過、県内の小中学校で外国籍担当の指導員を長く経験）である。インタビューでは、2節の結果を図表と簡単な文章で提示し、口頭で説明した後、自由に意見を述べてもらった。全体的結果については、4人とも共通して、わかりやすく納得のいく結果であるとしている。以下、項目ごとに内容を整理して提示する。

(1) アイデンティティと将来の居住国

アイデンティティについては、「環境次第。親の影響が大きい」；「たとえば県営団地は家賃が安いのでブラジル人が多く住んでいて、ブラジル人コミュニティができているため、ブラジル人アイデンティティが維持されやすい」；「日本人アイデンティティをもつかどうかは、日本語ができるかどうか大きい」；「幼いころ来日した子どもは、ほとんど完全に日本人」などの意見があった。また、「アイデンティティの「共存」と「わからない」はほぼイコールではないか。人によっては、都合のいいように使い分けをしているかもしれない」との指摘もあった。

将来の居住国については、「将来ブラジルに帰りたいと言う者は多いが、ほとんどは帰らないし、帰っても1~2年で日本に舞い戻ってくるケースも多い。実際、帰っても、ブラジルには仕事がないのが現状。さらに、小学生くらいまでに来日した場合、ポルトガル語がビジネスに耐えるレベルではなく、かなり勉強しなおさなければならないと思う」と、希望と現実のギャップが指摘された。

アイデンティティと将来の居住国の関係については、「親とアイデンティティが同じでも、将来の居住国については親は母国、子どもは日本というケースが多いのではないか」；「将来の居住国は親子で一致していても、アイデンティティについては、親は出身国だが子供は日本または共存と答えている者も多いのではないか」などの意見があった。

(2) アイデンティティ・将来の居住国と日本での滞在期間

滞在年数、来日年齢とアイデンティティの関係については、「現在11年以上日本にいる者は、日本で生まれたか、ほとんど物心つく前に来日した者で、今15歳までくらいの者である。し

たがって、日本人アイデンティティが多いというのも理解できる。今後、もう少し母国で成長してから来日した者が滞在 11 年を超えたとき、同じように日本人アイデンティティが多いかどうかはわからない。おそらく、家庭や周りの環境、日本での体験に大きく影響されると思われる」；「日本で生まれた者、小さい頃に来日した者は、小学校の初期、日本人の子どもの中で国籍が日本でないことを恥しく感じ、誇りをもてずアイデンティティに悩むケースもある。そういう子どもも、大きくなって一旦母国を体験することで、母国に誇りを持ちアイデンティティが目覚める場合が多い」；「小学校以下で来日した者に、2つのアイデンティティが共存しているケースが多い。このことは、親の影響のほかに、日本語がどれだけできるか、どれだけ学校に慣れて友達ができるかなどが影響しているのではないか」など、滞在年数、来日年齢と、それに応じた生活経験が、アイデンティティの形成に強く影響を及ぼすとの指摘が目立った。また、R と C は、「15,6 歳で日本に来たが、日本的になってくることはあっても、日本人であると考えたことはない。母文化への誇りは変わらず維持している」と述べている。

滞在年数と将来の居住国の関係については、次のような意見があった；「滞在が 11 年以上であるにもかかわらず、将来の居住国をわからないと回答している者が多いのは、日本語ができ、日本の文化に慣れてもなお、日本での生活に不安をもつものが少なくないことを示しているのではないか。実際、向こう（母国）の方がのんびりできて楽しいという声をよく聞く。この不安には、親が日本で苦勞している姿を見ていることから、これからはずっと日本で同じことをしていいのかという疑問があるのではないか。」また、「将来どうなるか、親が帰っても自分（子ども）が日本に残るのか、興味がある」との声も聞かれた。

(3) 家庭での言語とアイデンティティや将来の居住国

家庭での言語とアイデンティティについては、「親が母国のことをどのように話すかも、アイデンティティに大きな影響を与える」；「親の日本語習得の意欲や能力も大きな影響がある。親が日本語ができないと日本人への誤解や良くないイメージを持つ者が増え、子供にマイナスのイメージを与える」；「親の教育経験の有無も重要な要素となる。親自身にしっかりした教育を受けた経験がない場合、子どもにしつけができず教育の仕組みや重要性が理解できない。高校受験にとって重要な時期に子供を長く国へ連れて帰ったりする」など、親の影響を重視する意見が多かった。

日本語能力と将来の居住国との関係に関する意見も多かった。たとえば、「将来、言葉を使って日本で仕事ができるかどうか、という要素が大きい。コミュニケーション能力の有無が将来計画に大きな影響を与える」；「日本語ができなくても仕事のため日本に残りたいと思う者が多いが、日本で暮らすことの不安は大きい」；「日本語ができない場合、不安だが仕事のために日本に住むか、言葉の通じる母国でのんびりした暮らしをするか、という選択で悩む者もいる」などである。また、日本語能力については、「どういう環境に住んでいるか、ということが、大きい。日系人の多い団地や集住地域に住んでブラジル人学校に通っている場合、日本人との交際も少なく日本語も上達しない」；「公立の学校に通っている場合、日本語の上達程度は、その子どもが周囲の日本人とどのくらい関わるかに左右される。その意味では、学校や担任の責任も大きい」；「親が積極的に日本人と交われば子どもも日本人の友人が増えるというように、親の姿勢にも影響される」などの指摘があった。

(4) 差別・いじめの経験とアイデンティティ

出身国アイデンティティをもつ者に差別・いじめ経験が多いという結果について、次のような意見があった；「言葉ができないことで、いじめの対象になり易い。逆に言葉ができると誤解が少なく、誤解があっても関係の修復が容易である。言葉ができるできないの差は大きい」；「文化の違いと言うより、習慣の違いが分かっていないことがきっかけで、いじめの対象になり易い」；「日本人側にさほど悪意がないような場面でも、日本語が十分できないと、自分を非難されているように感じることが多い。日本語がわからないために、日本人を誤解し非難している者も少なくない」；「若者自身に差別やいじめを受けた経験がなくても、親の体験話を聞いて影響を受けることがある（ただし、親の体験が必ずしも正しく伝わっているとは限らない）。」このように、日本語や日本の習慣がわからないことからくる、日本人の言動に対するいわば過剰反応を指摘する意見があった。

また、これと関連して、日本人との交流の薄さが情報不足につながっているという意見もあった。たとえば、「親の人間関係が同じ会社の同国人だけでとどまっていると、日本の学校の情報が入らない。それどころか、日本の学校に入れるといじめられるといった一面的なデマが流れていたりする」などの意見があった。

全体として、アイデンティティや将来の居住国の問題には、日本語能力や日本の生活習慣への適応能力が大きく関わっていること、それらは親の影響や周囲の社会的環境によって左右されることが強調された。

4. 総括と展望

以上、(1)日本で暮らす南米日系の青少年のアイデンティティ形成は、来日時年齢や滞在期間と強く関連していること、(2)アイデンティティの分布と比べて、将来の出身国については母国を選択する割合が小さいこと、(3)アイデンティティと関連する要因として、家庭での使用言語、差別・いじめの経験があること、を述べてきた。これらの結果は、当の南米日系の人々にとっても、重要な関心事であった。以下、それぞれについて考察していこう。

(1) アイデンティティ形成には、来日時年齢と滞在期間が大きく影響している。この結果は上述の箕浦（1991）の結果とも符合する。もう少し詳しく見ると、日本人アイデンティティをもっているのは7歳未満で来日した子ども（日本で生まれた子どもも含む）のみであり、日本人と出身国人のアイデンティティが共存していたり、わからないと回答したのは、ほとんどが12歳までに来日した子どもたちであった。また、滞在期間が10年以下で日本人アイデンティティをもっている者はいなかった。箕浦（1991）は、アメリカに暮らす日本人の子どものアメリカ文化への適応について、9歳未満で渡米した子どもは異文化への抵抗をあまり示さないこと、9歳から11歳の場合は比較的スムーズに適応するが、母文化との違いに困難を感じる子どももいること、11歳から15歳の場合は母文化と新しい文化の不協和を感じることで、15歳以降の場合はそれまでに暮らした母文化の影響が色濃く残り、異文化に包摂されてしまうことはないこと、を見出している。そしてこの結果から、9歳から15歳までが、文化特有の意味空間を体得し内在化する重要な臨界期であるとしている（箕浦、1994）。本研究が示唆するのは、エスニック・アイデンティティ形成にも同じような臨界期があることだ。具体的には、13歳くらいになると母国人アイデンティティが確立し、異文化に入っ

でもそれが揺らぐことはまずない。しかし、12歳以下で来日した場合、母国人アイデンティティが形成途上のため、母国人アイデンティティが揺らいだり、日本人アイデンティティと共存したりする。特に、小学校年齢で来日した子どもたちには、その滞在が長期になるにしたがって、アイデンティティの揺れも顕著に現れている。

- (2) 出身国アイデンティティを持ちつつも、将来の居住国として出身国を選択しない者が多い。このことは、現在日本に暮らしているという状況の中で、実利的、現実的な将来設計をしている者が多いことを示している。中には、日本語が十分とはいええず、日本が好きというわけではないにもかかわらず、生活のため、家族のために日本に住むという者も少なくない。

南米日系人の将来設計については、丹野(1999)の在日ブラジル人工場労働者の将来設計に関する調査が参考になる。今後の日本への滞在予定を聞いたところ、「1年」「2年」「3年」の計が52.0%に対し、「10年」「10年以上」「永住」の計は5.2%と少ない。反面、「わからない」が36.6%と3分の1を越えている。また、滞在が予定外に延びた理由では、初来日者・複数回来日者とも、「日本が良いから」(2.4%・5.9%)、「子どもの教育のため」(4.2%・3.1%)といった積極的な理由は少なく、「貯金ができない」(26.1%・40.4%)、「出身国の状況が悪い」(15.7%・26.2%)、「出身国で見通しがたたない」(11.9%・18.3%)など、消極的な理由が多い。また、「日本で結婚した」(15.8%・17.7%)という理由も少なくない。1998年の調査であるが、いずれも日本滞在が長期化するほど滞在理由も明確になることが、この調査から見て取れる。本稿のアンケート調査は、その後7年を経て行っているのが、その間、丹野の調査対象となった人々の子どもが呼び寄せられ(あるいは日本で生まれ)成長しているケースも少なくないであろう。回答者の若者の将来設計にこうした背景が影響しているであろうことは十分考えられる。

将来の居住国について、もう2点述べておきたい。出身国アイデンティティをもつ者の約3分の1が、将来の居住国を出身国と回答している。しかしおそらく現実には、さまざまな事情(特に、上述の「消極的理由」)から、将来にわたって日本に住むことを余儀なくされるケースが多いだろう。また、滞在年数が11年以上であるにもかかわらず、将来の居住国をわからないと回答している者が少なくない。このことは、日本語を操り、日本文化に十分適応した子どもたちにとっても、なお日本での生活に不安が残ることを示しているかもしれない。

- (3) アイデンティティと関連する要因として、家庭での使用言語、差別・いじめの経験が見出された。

家庭での言語が日本語であるのは、日本人アイデンティティをもつ5名のみであり、彼らは全員が日本で生まれた者であった。したがって、母国で生まれてから来日した子どもの家庭では、母国語、あるいは、母国語と日本語が使われている。一般的に、ほとんどの親は日本語が堪能ではないので、日本語と母国語の両方が使用言語となっている家庭では、親(親同士、親から子ども)が母国語、子ども(兄弟同士など)が日本語というパターンが多いと思われる。このようなパターンの場合、子どもが日本語を覚えるにつれて、言語のギャップから親子のコミュニケーションが困難となっていくことが懸念される。反面、ある程度大きくなってから来日した子どもは、日本の学校で学んでいるからといって、なかなか日本人と同じように日本語を操れるようにはならず、とりわけいわゆる学習思考言語におけるハンディキャップが大きい(イシカワ, 2005)。特に、第一言語を習得する(およそ12歳)以前に来

日した場合、母国語も日本語も学習思考言語のレベルに達しないおそれがあり、子どもの言語環境には十分な配慮が必要である。他方、出身国人アイデンティティをもち、家庭では母国語のみを使用する者がきわめて多い。おそらく彼らの中には、南米日系人が大半を占める職場で働くなど、母国語のみで生活できるような環境にある者もいると思われる。このような環境では、出身国アイデンティティは強固に維持されるだろうが、反面、日本での滞在が長期化した場合に、日本への適応が進まない危険性もあるかもしれない。

差別・いじめの経験とアイデンティティの関連については、出身国人アイデンティティをもつものに比較的経験者が多かった。青少年期に学校や社会においていじめ・差別を受ける経験は、自分が外国人であることを再認識させられる負の要因であり、この経験がアイデンティティの形成に影響している可能性は否定できない。一方、出身国人アイデンティティが強固な者が、対人的な習慣、ルール、表現方法などの違いをあえて出すことによって、日本人の不快感や誤解を招き、差別やいじめにつながっていくこともありうる。たとえば、外国人アイデンティティを強く持つ者が、大勢の中でも自分の意見をはっきり言う、前置きなど婉曲的な表現をせず直截な物言いをするなど、あえて日本人的言動とは異なる言動をするような場合、そのことがいじめや差別を誘発することもあるだろう。

また、差別やいじめの経験は、日本語の能力とも深く関連している。このことは3節のインタビューでも多くのインタビューーが指摘していた。具体的には、日本語がよく理解できないために、もともと悪意なく対応してくれた日本人の態度に疑念を抱き、それを差別・いじめと捉えるケース、また、そうした誤解を持って対応し日本人側の感情を害し、差別的な態度のきっかけとなってしまいうケースなどである。以上のように、差別やいじめの経験とアイデンティティの間には、相互強化的な関係があるといえる。

1990年に入管法が改定されて以来、16年が経過した。現在、日本での滞在が10年を超える若者の多くは、幼少時に来日し、中学生、高校生に相当する年齢になっている。最近では、南米日系人の定住化が進みつつあり、日本で結婚して子どもを生むケースも増えている。母国での生活経験がほとんどなく、生活史の大部分を日本で過ごしている若者が、ごく自然に日本語を話し、日本の価値観や行動規範を身につけ、日本人アイデンティティを形成するケースは、今後も増加していくだろう。このようなケースでは、親のほとんどは日本語をあまり話せず、明確な出身国アイデンティティをもっているために、親子間のコミュニケーションや価値規範のギャップをどうするかが課題となる。

他方、中学生、高校生くらいの年齢になってから、来日する若者も多い。彼らは、母国で、第一言語たる母語を身につけ、学習思考言語をマスターし、母国の文化文法を体得し、強固な出身国アイデンティティをもっている。彼らの多くは、まだ滞在年数がそれほど長くはないが、この先滞在が長期化しても、アイデンティティが揺らぐことはないだろう。このようなケースでは、日常的な交流が出身国人同士の間で限定されていることが多く、日本語が堪能でなくともそれほど不便ではないことが多い。しかし、日本での滞在が予定以上に長期化したり、日本で結婚や出産をするなどして、日本人や日本社会との関わりを持たざるをえなくなったときに、日本文化への不適応や、日本人とのコンフリクトが問題となる可能性がある。

最も問題となるのは、小学生くらいの年齢で来日した若者である。小学生の時期は、第一言語を習得し、学習思考言語を操れるようになり、文化の価値規範を内面化し、エスニック・ア

アイデンティティを形成する重要な時期である。この時期に母国をはなれて異文化で暮らすことになると、下手をすると、どちらの国の言葉も、文化文法も、アイデンティティも身につかないことになりかねない。実際、小学校年齢で来日した子どもたちは、滞在が長期になるにしたがって、アイデンティティの揺れも顕著に現れている。

今後、南米日系人の定住化が進み、若者、特に就学年齢の子どもが増加することが予想されている。最近では、文部科学省が2005-6年に「不就学外国人児童生徒支援事業」を実施、総務省が2006年に「多文化共生推進プログラム」をまとめるなど、外国人の生活環境、教育環境を改善しようという動きが国レベルでも見られるようになった。日本で暮らす南米日系の若者たちが、今後の成長の過程でどのようにアイデンティティを形成していくのか、日本や母国での生活経験や心理的距離、家族や友人との関係性などさまざまな影響に配視しつつ、より深く検討していきたい。

注

- 1) たとえば、「在日ブラジル人に係る諸問題に関するシンポジウム」(2004年3月、外務省)では、教育問題として、「学校への不適応などを要因とする不就学児童の増加(推定約1万5千人)は最も深刻な問題となっている。不就学に伴う青少年犯罪の急増も深刻である」と述べられている。
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/latinamerica/kaigi/brazil/sympo_2004.html
- 2) エスニック・アイデンティティと密接に関わる概念に、文化的アイデンティティがある。文化的アイデンティティとは、「自分自身がある文化に所属している感覚」であり(鈴木, 2005)、「国籍がどこであれ、日本人とかアメリカ人であるとかいうことからくる深い感情、ライフ・スタイル、立居振舞い、興味や好みや考え方を全部ひっくるめたもの」である(箕浦, 1991, p.246)。本稿では、両者を同義として捉えている。

引用文献

- 郡司英美 2005 日系ブラジル人の子どもを取り巻く研究の再検討, 異文化間教育, 21, pp.44-56
- イシカワ エウニセ アケミ 2005 家族は子どもの教育にどうかかわるか 宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会 第4章
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005『顔の見えない定住化 日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会
- 児玉克哉・藤本久司・荒川哲郎・永田素彦・石阪督規 2005 日系ブラジル人の少年犯罪に関わる社会環境についての研究 社会安全研究財団報告書
- 箕浦康子 1991『子供の異文化体験』思索社
- 箕浦康子 1994 異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ 教育学研究, 61, pp.9-17
- 宮島喬 2003『共に生きられる日本へ 外国人施策とその課題』有斐閣選書
- 太田晴雄・坪谷美欧子 2005 学校に通わない子どもたち 宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会 第1章
- Phinney, J. S. 1996 When we talk about American ethnic groups, what do we mean? *American Psychologist*, 51, pp.918-927
- 関口知子 2003『在日日系ブラジル人の子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店
- 鈴木一代 2004「国際児」の文化的アイデンティティ形成: インドネシアの日系国際児の事例を中心に 異文化間教育, 19, pp.42-53

- 鈴木一代 2005 日系国際児の文化的アイデンティティ形成—事例の検討— 埼玉学園大学紀要（人間学部篇）, 5, pp.85-98
- 丹野清人 1999 在日ブラジル人の実像—工場労働者の生活と将来設計を中心に— 梶田孝道編『トランスナショナルな環境下での新たな移住プロセス—デカセギ10年を経た日系人の社会学的調査報告』第3章
- 辻本昌弘 1998 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程：南米日系移住地から日本への移民労働者の事例研究 社会心理学研究, 14, pp.1-11